現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第18回

足寄町から発信する「放牧酪農」の確かな営み

酪農の原点を見つめ放牧に挑戦 新規就農の学校開設や「宣言」へ

化学肥料を撒かず牛たちに土・草づくりをやってもらう、吉川友二・千枝さん夫婦の「ありがとう牧場」の夏（写真右）。放牧研究会の学習会は夫婦そろって参加が原則で、和やかな雰囲気で経営や生活を語り合う（左下・昨年11月、上芽登地区の会館で）

ルポライター
滝川 康治

北海道の酪農地帯の牧草地から牛の姿がめっきり減って久しい。そんななか、十勝管内足寄町の酪農家たちが八年前に研究会をつくり、放牧型の酪農経営に転換。活動の輪は広がり、放牧グループが増え、新規就農を志す人たちの「放牧学校」の開設準備も進んでいる。酪農の原点を見つめ直す人たちや「放牧牛乳」の良さをリポートする。

夫婦そろって参加し NZ訪問も実現する

日本で一番広い行政面積をもつ十勝管内足寄町。かつて戦後開拓の苦闘の舞台になった山麓の傾斜地を中心に酪農地帯が広がり、百二十戸ほどが一万頭あまりの乳牛を飼養している。

昨年十一月中旬、足寄町放牧酪農研究会（佐藤智好会長・8戸）の学習会には、夫婦で参加した酪農家や新規就農を志す若者ら二十人ほどが集まった。話題の中心は、ニュージーランド（NZ）から帰国した二組の夫婦と農協職員による、酪農視察の報告である。

「（訪問して）とても良かったので、みんなにも行ってもらいたいね」

「農家の生の声が聞けなかったのが残念だ。畑の土をほじってみてもミミズはいなかった。（牛が食べる）草の総量が少ないんでないかな」

「（NZは）土地からカネを儲けよう、という感覚が強い。牛のウンコを入れて循環型で酪農をやろうとしている」

「いや、糞はペタペタとあるだけだった。うちの放牧地なら、牛のいるところは糞だらけだよ」

町並みの美しさに魅了された女性たち、男性陣からは自分の経営や草づくりと対比させたシビアな発言がつづく。研究会の別名は「ニュージーランドに家族で行こう会」。すでに半数以上の会員が行ってみた、という。

いまから九年前に同国を訪れ、牧草地を適当な広さに区分けして電気牧柵で囲って牛を放し、順に牧区を変えていく「集約放牧」によって低コスト酪農をやっている姿に共感した佐藤会長（1949年生まれ）は、

「（一定の面積に収容可能な）ギリギリの数の牛を入れて最大の効率を上げて、儲けることが（NZ酪農の）主眼になっている。今後は、オーガニックミルク（有機牛乳）のこともあるので、ヨーロッパの堅実な農家を訪ねる必要があるんじゃないか」

と会員たちにアドバイスする。

美しい金髪女性が平然と雄牛の精液採取の様子を説明したうえ、カメラを向けるとポーズまで取ってくれた――という話には、爆笑がわき起こる。近く新規就農する二組の若い夫婦が近況を報告するなど、和やかな雰囲気で語り合う姿に、この町で放牧酪農を進める人たちの心意気を感じとれた。

「高泌乳＝高所得」にこだわらず放牧に転換

三十年ほど前まで道内どこでも見られた乳牛の放牧風景は、飼養数の拡大と一頭あたりの生産乳量を増やす経営が主流になるにつれて、目にすることがめっきり減った。その結果、「八一年当時には四割近い（放牧による草地の）利用が、九七年にはわずか一割以下へと大きく低下」（北海道酪農畜産協会の須藤純一さん）した。

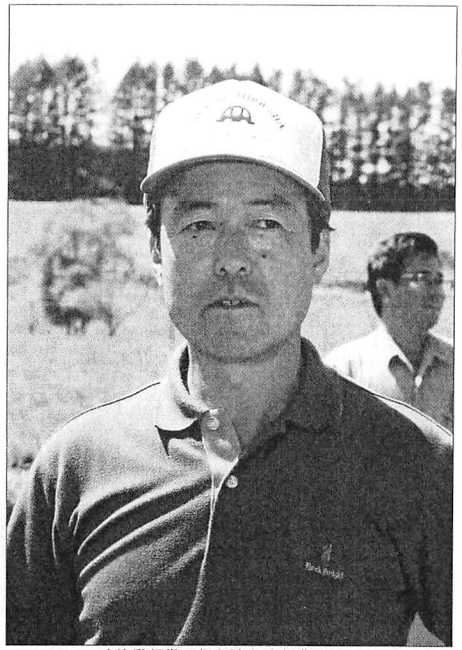
自給飼料を生産できる広大な草地があり、牧歌的な農村風景で北海道を売りこんできたにもかかわらず、多くの

乳牛は狭い牛舎のなかでアメリカ産の穀物を大量に食べさせられ、〝牛乳製造装置〟として酷使される――という、いびつな生産構造がある。ここ数年、放牧が見直されてはいるが、たとえばわたしが暮らす道北の下川町では、酪農家四十戸ほどのうち、本格的な放牧を行なうのは、わずか二戸にすぎない。

足寄町では、戦前の軍馬飼育地帯を解放して開拓農家が大量に入植し、雑穀などの栽培をへて、六〇年代初めから気候条件に左右されにくい酪農が導入された。国の構造改善事業などを導入してサイロや大型機械の整備がなされた七〇年代半ばには、施設型の酪農への転換が進んできた、という。

開拓二代目の佐藤会長もまた、規模拡大を見越して七〇年代に町西部の芽登地区に移転した。舎飼いで穀物を多給し、一頭当たり乳量一万キロ／年もの高泌乳経営をめざしたが、牛本来の生理に反した飼い方なので繁殖障害や病気の発生に悩まされた。「高泌乳＝高所得」は実現できず、将来の経営に希望を持てないでいた。

そんななか、放牧酪農で成果を上げている浜頓別町の池田邦雄さんの牧場や、ニュージーランドを視察して、自然に逆らわない循環型酪農への挑戦を決意する。そして九六年、性格や経営状況の違う人たちに声をかけて、四十代半ばの七戸で研究会を設立した。当初から「夫婦そろっての参加」を目標に掲げてきたのが会の特色である。


高泌乳経営に行き詰まりを感じて
放牧に転換した会長の佐藤智好さん

開けっ広げに議論し 3年ほどで経営好転

現在の会員は、会長の佐藤智好・さくらさん、副会長の黒田正義・節子さん、会計の本間正喜・あつこさん、柴田哲夫・静枝さん、本間隆・恵美子さん、村山昭雄・裕子さん、佐藤敏明・一二三さん、新規就農者の吉川友二・千枝さんの八夫婦。いずれも足寄町開拓農協の組合員で、三十～百ヘクタールの草地に三十～百十頭ほどの乳牛を飼う人たちだ。会員宅でのフィールド研修や国内外の視察、学習会などの活動を積み重ねる一方、昨年八月には全国から二百人あまりが参加して盛会だった「放牧酪農ネットワーク交流会」を足寄で開催する原動力になった。

「最初のうちは集まっても暗い話が多く、負債残高ひとつにしても数百万円から六千万円まで差があった。でも、各メンバーの経営内容を開けっ広げにして、みんなで『厳しい経営をどうしようか』と論じあえた。『働き方が悪い』『牛にエサを食わせすぎている』とか、ずいぶんディスカッションしましたよ。人との交流ができて、初めて自分たちが良い方向に進んでいるかどうか分かってきたんです」

佐藤会長は七年間をこう振り返る。

会員たちが自信をもつようになったのは、発足から三年ほどで経営内容が好転したことが大きい。

昼夜放牧することで飼料代が減り、健康を取り戻した牛たちは乳房炎などの病気が減って耐用年数も延びた。牛舎での給餌や糞尿処理などが楽になった。牛が「歩く草刈り機」をやってくれるので、作業時間が短くなって生活にゆとりができた。牛が放牧地に排泄する糞尿は土を肥やしてくれる……。

その結果、乳量が多少減っても、飼料代などの支出額が少なくなって経営が安定し、負債の償還財源が生みだされていった。農業の世界は、立派な理論を振りかざしても、経営が良くないと評価されない。経営の好転は会員たちの自信と矜持につながり、町内外から注目されるようになった。いまでは、足寄といえば「放牧酪農」を抜きに語れないほどだ。

事務局の坂本秀文さん（足寄開拓農協職員・1948年生まれ）は、

「会員たちは最初、しゃべりは下手で、ここまでやれるとは思わなかった。いまでは、借金の額まで分かりあい、互いにアドバイスする空気がある。こちらから知らせてもいないのに、学生や『自姓をやりたい』と言う若者が寄ってくる。研究会ができて、新規就農の希望者がどっと増え、農協にくる問い合わせをさばききれない」

と、予想外の反響に笑顔を見せる。

研究会の発足当初から積極的に関わってきた町農林課の桜井光雄・農政係長（1956年生まれ）は、

「メンバーの年代は経営方向を変える最後のチャンスで一つの賭け、当時としては勇気のある手法でした。『もう後戻りできない。失敗しても自分の責任だ』と言って真剣にやっている。足寄農業が生き残るには『農協に頼らない』に軸足をおく――その基になるのは放牧酪農。役場や農協が放牧推進の音頭をとったらダメです。具体的な経営実績が出てきて放牧が広がると、役場や農協がネットワークづくりに協力する態勢にしています」

と、行政側の支援姿勢を説明する。坂本・桜井さんの熱心な協力が研究会を支えた面も大きいようだ。

ニュージーランド方式に学び循環型の酪農を試みる新規就農の吉川さん

放牧で土を良くして ゆとりの生活めざす

足寄町市街地から車で十分ほどの山間の傾斜地に、二〇〇〇年に新規就農した会員の吉川さん夫婦が営む「ありがとう牧場」が広がる。大がかりな牛舎はなく、牧草の生育時期に牛乳生産がピークになるよう三～四月に集中分娩させるなど徹底したやり方を試みており、地域に新風を吹き込んでいる。

「うちの目標は、放牧した牛に堆肥をたくさん撒いてもらうこと。最近、やっと糞の下にミミズが湧くようになった。放牧で土が良くなり、トータルで食っていけるならば、目に見えない利益があるんじゃないか。僕は、牛と草と土の神秘の世界を信じていますよ」

九〇年代にニュージーランドで働いた経験がある吉川友二さん（1964年生まれ）は、こう言って土・草・牛が循環する酪農の実現に意欲をみせる。

長野県生まれの吉川さんは、子どものころに田舎暮らしを夢見て育ち、北大に進んでからは「自然保護のような仕事ができれば…」と考えていた。卒業後は、自給自足の暮らしをめざして道内各地の有機栽培農家などを訪ね歩き、出稼ぎ生活も経験した。

旭川市内の山間部で「牛が耕す牧場」を営む斉藤晶さんの著作を読んだのが放牧酪農との出会いだった。「穀物を与えずにやる方法があるんだな」と思い、九三年には斉藤牧場で働いてみた。その後、友人宅でニュージーランド酪農を紹介した本を見つけ、配合飼料を与えない酪農を知り、「やるならこれだ！」と直感。著者の一人に手紙を書き、同国に渡ったという。

ニュージーランドでは二十歳の若者が二百頭の牛の飼養を任されていた。「その青年との出会いが四年間いた原動力。若者たちは農場主になる夢をもち活気があった」と語る吉川さん自身も、四年目には百六十頭規模の牧場を

全国から200人あまりが参加した「放牧酪農ネットワーク交流会in足寄」のシンポ（昨年8月）

任された。そして、たまたま視察にやってきた佐藤会長との出会いが足寄に入植するきっかけになった。

八十六ヘクタールの土地（うち放牧用は50ヘクタール）で三十七頭の成牛と育成牛約三十頭を飼うが、季節分娩なので一～二月は搾乳作業がなく、時間的なゆとりがある。上づくりにこだわっているので、「春先に草の伸びが悪いと喉から手が出るほどほしくなる」（吉川さん）が、化学肥料は使わない。その代わり、放牧地に堆肥を年に三回散布したり、急傾斜地には乾草やサイレージ（発酵飼料）を運んで牛に糞尿をかけさせる…と、根気よく土を良くする仕事に取りくむ。酪農経験のあるわたしは、そんな話を聞くと「偉いなあ」と感心してしまう。

配合飼料の給与量も、夏場は一日二キロ、最多でも五キロと、一般の酪農家の数分の一。素性の明らかな道産・国産穀物を与えるなど工夫を重ねていくと、飼料の自給や有機酪農を実現させることも難しくないだろう。

六千万円あまりの負債があるが、「化学肥料を使わずに踏ん張り、人も牛も無理せず、借金を返せるようにしたい」と淡々と話す。「ありがとう牧場」で研修してから町内で新規就農する人も現れており、吉川さんの実践は大きな刺激を与えているようだ。

新規就農の放牧学校や牛乳の加工構想も

研究会の発足から八年、足寄町の放牧酪農は静かな広がりを見せている。九九年には新たに開拓農協組合員の五戸が山麓放牧の会（雲和行会長）を結成し、足寄農協の組合員五戸も独自に第三のグループを立ち上げた。

吉川さんのような放牧志向の新規就農希望者も増えている。といっても、「（技術や資金などで）新規就農者のフォローアップには七年かかり、年間二～三戸を入れるのが限界」（町農林課）なので、事はそう簡単ではない。

そこで足寄町は、芽登地区の廃校を利用して、宿泊施設を備えた「放牧学校」を開設する準備を進めている。新規就農を志す人や農業関係の学生、府県出身の若者らが対象。単身者は学校に宿泊、既婚者は公営住宅などで生活しながら、放牧酪農に取りくむ農家へ研修に通って学ぶ――という計画で、校長は道内の先駆者に依頼する予定。いまは事前調査の段階だが、近い将来、放牧酪農の拠点が誕生する。

ここで学んだ人たちが全道各地に散って放牧酪農に取りくめば、新たな発想で農業の原点に返ることができるようになる。明日への希望が持てる「放牧学校」が誕生するときが楽しみだ。

町内には第三セクターのチーズ工場「エーデルケーゼ館」があるが、ここで放牧牛の生乳からチーズや飲用乳を製造する計画も練っている。

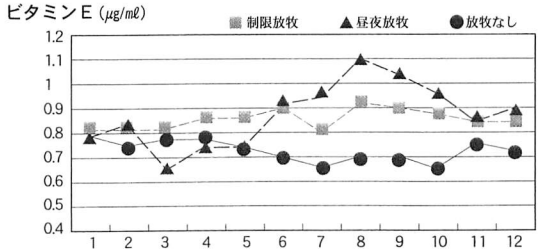
「放牧牛の生乳には抗酸化機能のあるラクトフェリンが含まれている。いままで子どもの飲み物と見られがちでしたが、今後は老人ホームや病院などで使う『お年寄りにやさしい牛乳』のイメージを持ってもらえるのではないか。『きょうは○○さんの牛乳です』という形で販売すべく工場側と相談しています」（前出の桜井農政係長）

阿久津勝彦町長（1期目）は「放牧酪農の推進」を掲げて当選しており、町として「推進」を宣言する構想がある。町内の二農協などに「技術と人材の両面で足寄を放牧酪農・北海道の発信地にしよう」と提案中だ。七戸の農家が先鞭をつけた試みに自治体が応え、地域の自立を模索する動きは頼もしい。

共役リノール酸などを多く含む放牧牛乳

「舎飼いするほうが楽に栄養を管理できて、生乳の生産量を増やせる」といった理由で放牧が敬遠された結果、人間は牛のそばを離れられない長時間労働の〝介護酪農〟と負債の山、牛は病気にかかりやすく短命になった。それでも放牧への転換がなかなか進まない最大の要因は、輸入穀物を混ぜた配合飼料が安く入手できたからだ。

が、もともと人間が食べられる穀物を輸入して家畜に大量に与え、排泄された糞尿が環境汚染を引き起こすような酪農・畜産のあり方に未来はない。飼料の自給率向上に貢献し、牛も人も健康になれる。環境保全にもつながる――冷静に考えれば、それだけでも放牧の優位性は明らかだ。



「放牧」と「放牧なし」の生乳に含まれるビタミンEの違い（道農政部の事例集より）

放牧酪農は牛乳や乳製品の消費者にも恵みを与えてくれる。

道立根釧農業試験場は九六年七月から一年あまり、釧路管内浜中町で「昼夜放牧」「制限放牧」「放牧なし」合わせて十七農場を選び、それぞれの生乳を採取して栄養成分を測定した。その結果、動脈硬化を防ぐ役割などがあるビタミンEや、β―カロチンの含量は、舎飼いよりも放牧農家の生乳のほうが高いことが明らかになっている（夏場の成分差が大。別項のグラフを参照）。

「若いチモシー（イネ科牧草）の生草にはビタミンEやカロチンが特段多く、多食させると生乳中に出てくる。放牧草だとさらに高くなる」（同試験場の高橋雅信・乳質生理科長）からだという。

農水省が所管する研究機関の実験結果によると、放牧草や乾草など粗飼料を多く与えるほど、O―157をはじめとする有害大腸菌の腸内での増殖が抑えられることも分かっている（02年10月8日付『日本農業新聞』）。

さらに、近年とみに注目を集めているのは、放牧牛の乳脂肪に含まれる共役リノール酸の量が多いことだ。

共役リノール酸（CLA＝conjugated linoleic acidの略）は脂肪酸のひとつで、十八個の炭素が鎖状に連なるなかに、特定の位置関係で二カ所の二重結合がある構造をしている（注＝リノール酸とは二重結合の位置と型が異なる）。七八年にアメリカで見いだされ、その後の研究によって発ガン抑制効果や脂質の低下、Ⅱ型糖尿病の予防、免疫力の向上など多彩な生理作用があることが分かってきた。未解明の部分も多いが、米国では栄養補助剤や機能性食品としての活用に医療・保健関係者らの関心が高まっている、と聞く。

共役リノール酸は、反すう動物の乳や肉、乳製品などに適当量が含まれるが、放牧牛の生乳には格段に多いことが国内試験機関の調査でも明らかになっている。これは、放牧の優位性を示すデータであり、消費者側にとっても朗報といえるだろう。

◆

わたしの生家は十数年前に廃業するまで放牧をやっていたので、その長所はよく分かる。いずれやってくる食料危機の時代を乗り越えて飼料を自給し、環境保全にも貢献するためにも、足寄などの実践に学んで、より多くの生産者が放牧酪農に戻してほしい、と思う。

「道産自給飼料で安全な牛乳の実現を」と、本州のよつ葉牛乳共同購入グループは先ごろ、道や道議会、ホクレンなどに要望書を出した。残念ながら、道内の消費者の反応はまだまだ鈍い。身近な牧場を訪ねて「見る・聞く・話す」ことから酪農の実態を学び、一緒により良い道を考えてみてはどうか。

乳業会社や農政の側が「放牧牛乳」に高い乳価を設定する方向に変われば、いままでのやり方を転換する人も増えるだろう。前出・吉川さんのような事例をもう一歩進めていくと、「有機牛乳」の実現も可能になってくる。

牛乳をたくさん搾って出荷するだけの「酪農王国・北海道」に希望はない。最終ユーザーである消費者の安全と健康に応えることを最優先しなければならない時代なのだから……。

■足寄町放牧酪農研究会
足寄町芽登一八八九　佐藤智好方
☎&FAX 01562・6・2136